◇◇

「海の生き物を守る会」メールマガジン No. 165　　2015. 10. 16（金）

うみひるも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage：http://e-amco.com/

◇◇

「今月の海の生きもの」　**ユキミノガイ**　*Limaria basilanica*

軟体動物門斧足綱ミノガイ科に属する二枚貝。やや膨らんだ白い薄質の殻を持つ。殻長は 5cm くらいまで成長する。両殻は前で開口し、完全に閉じない。普段は写真のように殻を半ば開いて、長くて多い触手を伸ばしている。外套膜にある触手は一般に赤いが、深紅から淡紅色、白色まで変異がある。写真の個体は白い。触手を使って海底で水平に移動する。敵に襲われた時は、両殻を激しく開閉させてパタパタと水中を泳ぐ。房総半島以南の熱帯太平洋の浅い海底に広く分布する。

（沖縄県名護市大浦湾にて　　西原千尋氏撮影）

目次

「今月の海の生きもの」ユキミノガイ・・・・・・・・・・・・・・・・1
1. 「海の生き物を守る会」の活動について・・・・・・・・・・・・・2
2. 「ウミウシ 切手コレクション」（13）立川賢一・・・・・・・・・7
3. 海の生き物とその生息環境に関するニュース・・・・・・・・・8
4. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報・・・・・・11
5. 「きらめく動物たちの命と海　久保田信の白浜だより」（88）・・18
6. 「有明海と三陸の水辺から」（20）田中 克・・・・・・・・・・・19
7. 「絶滅危惧種 ヒト科ヒト属ヒト」（5）横濱康継・・・・・・・21
8. 事務局便り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
9. 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

1.「海の生き物を守る会」の活動について

【活動予定】

●写真展「大浦湾の生きものたち」京都で開催

海の生き物を守る会では、10 月 22 日～26 日に、京都市河原町御池の京都市役所前地下街**(ゼスト御池)**で、写真展実行委員会主催の**写真展「大浦湾の生きものたち」**に協賛団体として参加します。

お近くの方や京都へ来られる予定の方は、ぜひとも写真展をご覧いただき、米軍基地を作るために失われる大浦湾の価値を確認していただきたいと思います。主催は写真展実行委員会。

※詳細は p3 参照

●10 月 31 日（土）神奈川県天神島で研修会を開催

海の生き物を守る会では、砂浜海岸生物調査の研修会を 10 月にも行います。日本自然保護協会との共催です。締め切り間近ですので、希望される方は至急お申し込みください。

日時：10 月 31 日（土）10:00～15:00
★お申し込みは、nokubo@tku.ac.jp 大久保まで

※詳細は p4 参照

沖縄本島北部、名護市東海岸に位置する「大浦湾」。川の流域に残された豊かな森、
河口のマングローブ、干潟、浅場の砂地や海草藻場、沖にむかって泥場やサンゴ群集。
湾口近くには水深60mもの深場や発達したリーフがあり、
多様性に満ちた海には驚くほど沢山の生きものたちがすんでいます。

2015年10月22日(木)～26日(月)

10時半～20時

開催場所　　ゼスト御池　寺町広場

河原町御池　京都市役所前　地下1F

主催：　「大浦湾の生きものたち」写真展実行委員会

協賛：　京都沖縄県人会　　海の生き物を守る会

写真：　ダイビングチームすなっくスナフキン

海の生き物を守る会・日本自然保護協会 共催

砂浜海岸生物調査研修会に参加しませんか？

日時：2015年10月31日（土）10:00~15:00

場所：横須賀市自然・人文博物館 天神崎臨海自然教育園 天神島ビジターセンター

講師：向井宏（北大名誉教授・海の生き物を守る会代表）

（公財）日本自然保護協会による自然しらべ2015砂浜成果報告も合わせて行います

アクセス：ＪＲ逗子駅または京急新逗子駅から
バス「佐島マリーナ前行」（約35分）終点下車 徒歩20分
（車）横浜横須賀道路衣笠ICから三浦縦貫道経由（出口から約20分）

持ち物・服装：濡れても良い靴・筆記用具・ビニール袋

～参加申し込み・お問い合わせは～

海の生き物を守る会　大久保 奈弥（東京経済大学）　nokubo@tku.ac.jp

●奄美大島で砂浜・サンゴのワークショップ　調査と講演会

海の生き物を守る会では、2015 年 12 月 18 日（金）～19 日（土）に、奄美大島の砂浜海岸の消失と採石場のサンゴ礁への影響についてのワークショップを、自然と文化を守る奄美会議の共催で行います。ワークショップは、18 日に砂浜海岸の視察を行い、19 日午後に奄美市公民館で講演会を行います。講演会の詳細は以下の通りです。参加希望者はご連絡下さい。

ワークショップ

「奄美の海の危機　～砂浜の消滅・サンゴ礁の崩壊～（仮題）」

主催：海の生き物を守る会　　共催：自然と文化を守る奄美会議
日時 1：2015 年 12 月 18 日（金）時間未定
場所 1：奄美大島大浜海岸、手広海岸、嘉徳海岸などを視察

日時 2：2015 年 12 月 19 日（土）13:30～17:00
場所 2：名瀬中央公民館ホール（奄美市）　約 100 人程度収容予定

【砂浜の浸食と消失】
・「大浜海岸・手広海岸・嘉徳海岸の過去と現状（仮題）」
　　未定（自然と文化を守る奄美会議）
・「奄美大島の砂浜の変動とその要因～なぜ砂浜は無くなるのか～（仮題）」
　　宇多高明氏（（財）土木研究センター審議役　なぎさ総合研究室長）

【サンゴ礁の崩壊】
・「奄美大島における採石事業とサンゴ礁生態系の崩壊（仮題）」
　　安部真理子氏（日本自然保護協会）

終了後、交流会を予定

※このワークショップは、コンサベーション・アライアンス・ジャパンと高木仁三郎市民科学基金の助成金によって運営されます

10 年ほど前の嘉徳海岸

現在の同じ海岸：砂がなくなり後背植生も浸食されている

●2016 年 1 月 23 日（土） 東京で市民調査に関するシンポ開催予定

海の生き物を守る会では、2016 年 1 月 23 日（土）の午後に東京都内で「市民調査に関するシンポジウム」を開催する予定で準備を進めています。市民調査について関心のある方、市民調査を実施している団体は、ぜひともご参加いただけますよう、ご案内します。会場その他詳細は未定です。

海の生き物を守る会主催

「市民調査を考える　～保全政策に繋がる調査へ～」

日時：2016 年 1 月 23 日（土）13:00～17:00
場所：未定（東京都内）
主催：海の生き物を守る会　　後援：日本自然保護協会

プログラム
13:00～13:10　開会挨拶：向井　宏（海の生き物を守る会）

13:10～15:10　市民調査の紹介と問題・改善の提起
① 海の生き物を守る会（大久保奈弥）
② 環瀬戸内海会議（湯浅一郎）
③ 日本自然保護協会（萩原正朗）
④ 上関の自然を守る会（高島美登里）
⑤ リーフチェック（安部真理子）
⑥ 干潟市民調査（鈴木孝男）
⑦ 三番瀬（伊藤昌尚）
⑧ 表浜ネットワーク（田中雄二）
⑨ 徳島自然観察会（井口利枝子）

15:10～15:20　休憩
15:20～16:50　ディスカッション：市民調査をいかに成功させるか？
意見・提言・政策紹介などを含めて

16:50～17:00　閉会挨拶：日本自然保護協会

18:00～20:00 海の生き物を守る会の**総会**（会場近くのレストランを予定）
※年に 1 回の総会です。会員の方も入会ご希望の方も、ぜひ今からご予定ください。

2. ウミウシ 切手コレクション（13） 立川賢一

5. 裸鰓目(NUDIBRANCHIA)

5－1. ドーリス亜目(DORIDINA)

5－1－3. ドーリス科(DORIDIDAE)

Jorunna funebris
ブチウミウシ

Halgerda tessellata
モザイクウミウシ

Halgerda tessellata
モザイクウミウシ

Halgerda corlsoni
コンペイトウミウシ

Halgerda willeyi
パイナップルウミウシ

Halgerda aurantiomaculata

5－1－4. ミカドウミウシ科(HEXABRANCHIDAE)

Hexabranchus sanguineus
ミカドウミウシ

Hexabranchus sanguineus
ミカドウミウシ

Hexabranchus sanguineus
ミカドウミウシ

Hexabranchus sanguineus
ミカドウミウシ

3. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【世界】

●発光するウミガメを発見

南太平洋のソロモン諸島付近で海洋生物の研究を行っていたアメリカのニューヨーク市立大学の調査団が、絶滅危惧種に指定されているウミガメ科のタイマイが、背中の甲羅から緑と赤の蛍光を発しているのを発見し、泳いでいるところを撮影することに成功した。生物の発光現象は、自身が発光する場合と発光バクテリアなどを共生させている場合があるが、タイマイの発光現象がどちらかは、まだ不明という。どちらにしても爬虫類で蛍光発光が確認されたのは初めてとされる。

【九州】

●国は高裁の和解勧告を拒否　安倍内閣は政務官に諫早地盤の議員を選出

長崎県諫早市の諫早湾干拓事業によって有明海の漁業が大打撃を受けたため、国に締め切り堤防の長期開門調査を求めた漁業者らの訴えを福岡高裁が認め、民主党政権が控訴を断念して開門調査を命じた判決が確定したが、国は開拓地の入植者らが反対していることを理由に開門調査を履行しないままになっている。これに対して、開門を訴えている漁業者らは、国が開門調査を実施しない場合は、原告１人１日 2 万円の制裁金を課することを訴え、佐賀地裁と福岡高裁がその訴えを認めた。そのため、国は現在までに 2 億円を超える制裁金を支払っている。一方、干拓地の入植者らが長崎地裁に対して、開門調査をしないように求めた訴えも認められ、地裁と福岡高裁は、国が開門調査を行った場合には、国が入植者らに制裁金を支払うよう判決した。矛盾する 2 つの判決について、国は上級審の判断を求めるとして、開門派の漁業者らに制裁金を強制しないことを求めて、福岡高裁に訴えている。この裁判では、裁判長が「紛争を抜本的総合的に解決するためには、国と開門派、開門反対派の 3 者が話し合って和解する以外に方法はない」として、和解勧告を出した。高裁は、国が最上級審の判断を待つという姿勢を変えないことを批判して、たとえ最上級審の判断が出されたとしても根本的な解決にはならないとし、「利害関係者の参加も考慮し、協議の場を設定することが肝要である」と勧告した。

この和解勧告を受けて、開門派の漁業者らは勧告を受け入れるとして国と意見交換会を開いたが、国は開門反対派の長崎県などが話し合いに参加しない姿勢を示していることを理由に、和解の協議に入ることは拒否した。漁業者らからは、「誠意ある態度を見せて欲しい」と厳しく批判する意見が多く出された。今月上旬に安部第３次内閣の農水相に就任した森山裕農相は、「この問題は非常に大きな問題なので、できる限り私が直接担当したい」と述べた。その一方で、農水政務官に長崎県諫早市を地盤とする加藤寛治議員が就任し、その中立性を疑われている。森山農相は、加藤政務官の中立性には「何ら心配していない」と述べるにとどまった。諫早問題は、農水省の間違った政策がその原因であることを認めて、解決を図らない限り、けっして根本的な解決もないし、有明海の再生もあり得ない。安倍内閣にその解決を期待することはできないだろう。

●収用委員会の調査、意見聴取も阻止　石木ダム建設反対で仮処分申請も

長崎県川棚町に県と佐世保市が建設を計画している石木ダムをめぐって、地権者の土地と家屋を強制的に接収してダム建設を強行しようという県の収用委員会は、地権者の土地家屋の資産推定のための立ち入り調査を地権者らの抗議で 4 日間にわたって中止に追い込まれたため、帳簿による推定に切り替えた。そして、収用手続としての地権者の意見聴取を行おうとしたが、これも会場の公民館に収容委員が入れず、中止となった。県は、収用手続を進める構えで、地権者は抗議の姿勢をいっそう強めている。

地権者の一人は「求めているのは補償金ではなく、ふるさとに住み続けたいということだけだ」「家を取り壊されてもプレハブ小屋を作ってでも戦い続ける」「収用委員会は土地を奪うことをやる前に、本当にダムが必要なのかどうかを審議すべきだ」と述べている。中村法道長崎県知事は、住民らの直接説明の要求に応じておらず、逃げ回るばかりとの批判も出ている。弁護団は、石木ダムの建設関連工事の差し止め仮処分の申請も考えている。

●天草で猛毒の巻貝タガヤサンミナシを発見

熱帯地方で猛毒を持つ巻貝として知られているイモガイ類のタガヤサンミナシが熊本県天草郡牛深町の浅海でダイバーによって 2 個体発見された。どちらも水深 5m ほどの海底の岩の下で見つかった。

熊本県では初めて確認されたもので、熊本県水産振興課では、「けっして触れないように」と呼びかけている。タガヤサンミナシは、矢の形をした歯舌と毒腺を持ち、ゴカイや小型の魚などを食べる。美しい姿形をしているため、間違って人間が刺されて死亡した例も知られている。紀伊半島以南に分布すると言われているが、熊本県ではこれまで確認されたことはなかった。海洋の温暖化が進み、さまざまな熱帯性の動植物の北上が報告されており、この種の場合もそれが原因かもしれない。

●瀬戸石ダムの堆砂問題で住民がダム管理の見直しを要求

熊本県球磨川の最下流にある荒瀬ダムが日本で初めて撤去されたことにより、下流の河川に清流が戻り、河口周辺には干潟や砂浜がよみがえり、藻場も再生していることが報告されている。その荒瀬ダムの上流にある瀬戸石ダムは、土砂の堆積が進み、2000～2015 年の 7 回に及ぶ国交省の調査でも、毎回「土砂の堆積が進み、洪水が発生する怖れがある」と指摘されている。瀬戸石ダムを運営管理する電源開発（J-パワー）では、2011～2024 年度に計 54 万㎥の土砂を除去する計画であるが、実際は堆砂が逆に進み、予定通り実施できていないと担当者も認めている。そこで、「瀬戸石ダムを撤去する会」の住民らが、電源開発にこの土砂除去計画を見直させるよう、国交省に要望書を提出した。また、ダム湖周辺の住民に説明会を行うよう、要求した。住民たちは、瀬戸石ダムを荒瀬ダムに続いて撤去させることを視野に、運動を続けている。国交省は、電源開発が計画を改善できず、ダムの管理運営に責任を持てないのであれば、ダムの撤去をさせるべきではないだろうか。

【沖縄】

●県が埋立許可を取り消す　辺野古基地の建設は多様性の消失に繋がる

沖縄県名護市の辺野古に日米政府が基地を建設しようとしていることに反対する沖縄県の翁長知事は、仲井真弘多前知事が埋立許可を行った手続きに瑕疵があるという第三者委員会の報告に基づき、許可取

り消し手続きを行っていたが、国が意見聴取にも聴聞にも応じようとしないため、10 月 13 日、手続きに沿って埋立許可を取り消した。これにより国は辺野古沖に米軍基地を建設することが不可能になった。しかし、防衛省は埋立免許が取り消されたことに異議申し立てを行い、最終的には裁判所に判断を仰ぐことにしている。政府は裁判所が安全保障や外交に関しては、司法判断しないことを見通して、強力に実質的な工事を進めようとしているが、法の秩序を無視した国の姿勢は、どこまで通用するのだろうか。沖縄県民の 8 割が反対している辺野古の基地建設を政府が無理矢理押し通すことによって、辺野古・大浦湾の極めて貴重なサンゴ礁やジュゴンなどの生物群集が絶滅に追いやられる。生物多様性条約によって日本政府が義務づけられている多様性の消失の防止という国際公約に反する事態を、世界に説明できるのだろうか。

●一粒たりとも故郷の土を戦争のために使わせない

「辺野古埋め立て土砂搬出反対」全国連絡協議会第 2 回総会が、10 月 3 日長崎市で開かれた。同連絡協議会は、今年 5 月に奄美大島で、辺野古埋め立て用の土砂を搬出する予定地で環境を守る 7 団体が中心になって結成したもの。海の生き物を守る会も参加している。第 2 回総会では、採石場のある長崎県五島の環境団体をはじめ、合計 14 団体が結集し、「一粒たりとも故郷の土を戦争のために使わせない」を合い言葉に、辺野古の埋立に反対するばかりではなく、各地の採石場周辺の環境を守る運動も進めることを確認し、事務局体制を確立した。共同代表には、自然と文化を守る奄美会議の大津幸夫さんと環瀬戸内海会議の阿部悦子さんが選ばれた。事務局長には、環瀬戸内海会議の松本宣崇さんが、事務局次長に北九州の連絡協議会の八記久美子さんが就任して、今後の運動を進めることを決めた。

同連絡協議会では、これまで 4 カ月で集めた反対署名約 50000 筆を、10 月 15 日に安倍首相に提出した。同時に、環境省、防衛省、国交省などに、辺野古へ西日本から土砂を搬出させないことを要望し、採石法の問題点については、国交省に質問書を送った。

長崎新聞 (24)

(平成27年) 10月4日 日曜日 社会

「辺野古埋め立て反対」

土砂搬出反対全国連絡協 国に申し入れへ

長崎で総会

米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古沿岸部への移設問題で、国が沿岸埋め立てに使う土砂の搬送を計画する地域の14市民団体でつくる「辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会」は3日、長崎市で総会を開いた。「沖縄とともに声を上げたい」とし、15日、政府へ反対の申し入れをする方針を決めた。

総会には、土砂の採取地とされる五島列島や瀬戸内海、奄美大島などの9団体から約20人が出席。現在集まっている約5万人分の反対署名と合わせ、政府や防衛、環境両省へ申し入れをすることを決めた。

同協議会の共同代表として「自然と文化を守る奄美会議」の大津幸夫さん（82）＝鹿児島県奄美市＝と、「環瀬戸内海会議」の阿部悦子さん（66）＝松山市＝を選出した。新上五島町の歌野敬さん(64)は「辺野古の埋め立てが、人ごとではないことを多くの県民に知ってもらいたい」と話した。

政府は沖縄県のほか、五島市の椛島、香川、山口、福岡、熊本、鹿児島各県から約2千万立方㍍の土砂を採取し、埋め立てに使う予定。同協議会は環境保全などを理由に、土砂搬出に反対するため5月に設立した。（田下寛明）

辺野古への土砂搬出に反対する政府申し入れを決めた全国連絡協議会総会＝長崎市筑後町、県教育文化会館

4. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【北海道】

◆北海道区水産研究所釧路庁舎の一般公開

当研究所では、研究内容や成果を広く皆様に知っていただくため、釧路庁舎の一般公開を行っております。タッチ水槽やいかすみ魚拓など、今年もご家族でお楽しみいただける内容盛りだくさんです。職員一同お待ちしております。入場無料で、事前のお申し込みは不要です。

日時：2015 年 10 月 24 日（土）10:00～15:30　　※本年は土曜日の開催です

場所：北海道区水産研究所　釧路庁舎（北海道釧路市桂恋 116 番地）※駐車場あり

問い合わせ先：釧路庁舎　業務管理室　Tel: 0154-91-9136

※詳細はこちら→　http://hnf.fra.affrc.go.jp/event/koukai2015/h27koukai.pdf

【関東】

◆水産総合研究センター 中央水産研究所の一般公開

国立研究開発法人水産総合研究センター 中央水産研究所では、研究の内容や成果を知っていただき、水産業と海や魚についての理解を深めていただくために、毎年 1 回一般公開を開催しています。今年は「来て、見て、触れて、水産研究」をテーマに、以下のとおり開催いたします。今年も漁業調査船蒼鷹丸(そうようまる)の桟橋公開を実施するほか、小さなお子様から大人の方まで楽しみながら学べる展示を用意し、皆さまのご来場を、スタッフ一同、心よりお待ちしております。入場無料、事前登録不要です。

共催：国際水産資源研究所　協力：横浜・八景島シーパラダイス、増養殖研究所

日時：2015 年 10 月 18 日（日曜日）10:00～16:00

場所：中央水産研究所（横浜市金沢区 福浦 2-12-4）金沢シーサイドライン市大医学部駅下車徒歩 5 分

展示内容：漁業調査船蒼鷹丸(そうようまる)見学、参加型ラボツアー（微生物を見てみよう、ホタテガイの解剖、魚拓にチャレンジ、の 3 コースから選択できます）、タッチプール、ちりめんモンスターをさがせ、ちくわ作り体験、あんじいのすいけんクイズ大会 豪華景品付！、クジラ写真展、プラ板キーホルダーづくり、東京湾の魚水槽展示、はく製展示、ウナギの幼生(レプトセファルス)展示、冷水性サンゴ展示、など　※天候状況等により一部内容を変更する場合があります。

その他：調査船蒼鷹丸の見学、参加型ラボツアー(全 3 コース)、ちくわ作り体験は、当日 10 時から整理券をお配りします。※調査船蒼鷹丸(そうようまる)は、横浜庁舎から約 4km 離れた専用桟橋に停泊中です。桟橋までは、整理券に記載された指定時間のシャトルバス(無料)でご案内します。専用桟橋に直接お越しになっても見学はできませんのでご注意下さい。調査船内は足元が悪いことから、サンダル等滑りやすい履物、並びにハイヒール等かかとの高い靴でのご乗船はご遠慮ください。

問い合わせ先：国立研究開発法人水産総合研究センター 中央水産研究所　Tel: 045-788-7615

◆東京大学大気海洋研究所の一般公開日 2015

日時：2015 年 10 月 24 日（土）10:00～16:30

場所：大気海洋研究所 2 階 219 会議室（千葉県柏市柏の葉 5-1-5）

プログラム（抜粋）

海の森のＤＶＤ鑑賞と海藻おしばづくり　※詳細はこちら→　http://www.kashiwa.u-tokyo.ac.jp

時間：11:00～、13:00～、14:30～（各 1 時間）

各回の定員：60 名（参加希望者には 1 階ホール受付で整理券配布）

スタッフ：高山優美認定講師・高橋祐桂会員・小島直子会員・田中寿代会員

◆東京湾大感謝祭２０１５

日時：2015 年 10 月 25 日（日）10:00～17:00

場所：横浜赤レンガ 1 号館 3 階ホール ブース番号 09（神奈川県横浜市）

プログラム（抜粋）

海藻おしばワークショップ　※詳細はこちら→　http://www.tbsaisei.com/fes/

時間：10:15 から 6 回開催

各回の定員：12 名（参加希望者には 10:00 からブース受付で整理券配布）

スタッフ：矢作裕子認定講師・箕島恵利認定講師・橋本美穂認定講師

◆戸塚エコフェア２０１５

日時：2015 年 11 月 14 日（土）10:00～16:00

場所：戸塚区役所 3 階区民広場 多目的スペース（神奈川県横浜市）

プログラム（抜粋）

海藻おしばワークショップ　※詳細はこちら→　http://www.city.yokohama.lg.jp/totsuka/

時間：10:14 から 5 回開催（定員１２名）

各回の定員：12 名（参加希望者には 10:00 からブース受付で整理券配布）

スタッフ：高山認定講師と会員有志（仲間たち）

◆東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会「環形動物の分類学に関するシンポジウム」日本およびその周辺におけるこれまでの知見と今後の課題

本研究集会の目的は、環形動物の様々なグループを対象とした分類学研究者が一堂に会して情報を交換し、東アジアの環形動物相の全体像についての理解を深め、今後の課題を浮き彫りにすることにある。環形動物の分類学を志している様々な世代の研究者が直接交流することにより、今後の研究の発展が促されることが期待される。

日時：2015 年 11 月 19 日（木）13:00～17:25　、11 月 20 日（金）10:00～16:00

場所：東京大学大気海洋研究所 2Ｆ　講義室（千葉県柏市柏の葉 5-1-5）

コンビーナー：佐藤正典（鹿児島大学）、大気海洋研対応者：狩野泰則（東京大学大気海洋研究所）

参加費：無料　懇親会費：3,000 円

問い合わせ先：佐藤正典（鹿児島大学）sato@sci.kagoshima-u.ac.jp

プログラム

11 月 19 日（木）

13:00　開会挨拶

13:10　佐藤正典（鹿児島大学）：日本のゴカイ科多毛類相：特に汽水産種について

13:40　Tae-Seo Park（National Institute of Biological Resources,　Korea）

：　Korean nereidids and polynoids.　（韓国のゴカイ科とウロコムシ科）

14:10　阿部博和（東北区水産研究所）

：スピオ科 Pseudopolydora 属の分類と Polydorids における穿孔能力の獲得プロセスについて

14:40　中野隆文(広島大学）：アジアにおける捕食性ヒル類（イシビル形亜目）の多様性と系統

15:25　山根美子（京都大学大学院）：日本産ジュズイミミズ科 Drawida 属の分類学的研究

15:45　Nonillon Aspe（北海道大学大学院）

：A taxonomic and phylogenic study of earthworms (Clitellata: Annelida) from Mindanao, Philippines（ミンダナオ島（フィリピン）産ミミズ類（環形動物門：環帯類）の系統分類学的研究）

16:05　小林元樹（東大大気海洋研究所）：北西太平洋におけるハオリムシ類の分類学的研究

16:25　鮫島旭恵（宮崎大学大学院）：日本周辺海域で記録されたナナテイソメ科環形動物の形態分類

16:45　向井稜（宮崎大学大学院）：日本産ダルマゴカイ科環形動物の分類

17:05　狩野泰則（東大大気海洋研究所）：環形動物の系統進化についての最近の論文を読み解く、

18:00　懇親会（プラザ憩い：柏の葉キャンパス食堂）　初心者向けの分子系統樹の解説

11 月 20 日（金）

10:00　横山寿（京都大学）：Paraprionospio 属多毛類分類の昨今

10:30　大越和加（東北大学大学院）：水産業に伴って移動するスピオ科多毛類の種の検討

11:00　自見直人（広島大学大学院）：日本産ミズヒキゴカイ科・ハボウキゴカイ科について

11:30　冨岡森理（北海道大学大学院）：日本産イトゴカイ類の系統分類学的研究

13:15　田中正敦（東邦大学）：ユムシ動物の系統分類学-現状と展望-

13:45　斉藤英俊（広島大学）：釣り餌として流通される環形動物の現状

14:15　花岡皆子(海洋生態研究所)：生物モニタリング調査で出会ってきた多毛類標本について

14:35　柁原宏（北海道大学大学院）：北海道産間隙性環形動物について

15:10 - 16:00　総合討論

◆【緊急シンポジウム】救え!　沖縄・泡瀬干潟
～辺野古埋立ての一方で進行するもうひとつの自然破壊～

沖縄県民の意志を無視して強行される辺野古の海の埋め立て。世界的にも貴重な大自然が破壊の危機に直面しています。辺野古・大浦湾ばかりではありません。泡瀬干潟、大嶺海岸、浦添海岸など辺野古と同様に生物多様性の宝庫である沖縄の海で不要不急な埋め立て工事が進んでいます。国は奄美・琉球諸島の世界自然遺産登録をめざしていますが、これら最も肝心な海域が対象区域から外されています。特に泡瀬干潟の埋立事業は、民主党政権の公約反故や杜撰な環境アセスメントなど辺野古埋め立てとさまざまな面で同質性があります。辺野古埋め立ての陰に隠れた泡瀬干潟埋立ての今を見つめ、干潟保全のための課題を考えます。

日時：2015 年 11 月 29 日（日）13：30～16：30
場所：小島社会教育館　都営小島ビル 2F（東京都台東区小島 1-5-2）　　JR 徒町駅から徒歩約 10 分、TX･都営大江戸線の新御徒町駅から徒歩約 4 分、東西めぐりん 36 番「小島社会教育館」下車
主催：ラムサール・ネットワーク日本、日本自然保護協会、泡瀬干潟を守る連絡会　協賛：依頼中
プログラム

- 沖縄の自然と世界遺産登録（筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻教授。IUCN 国際自然保護連合日本委員会会長・吉田正人）
- 危機に瀕する沖縄の海（日本自然保護協会・安部真理子）
- 泡瀬干潟をラムサール登録地に！（ラムサール・ネットワーク日本 共同代表・前川盛治）
- 決議採択　「泡瀬干潟のラムサール条約登録を 2018 年のラムサール COP13 で実現させる」

★申し込み・お問い合わせ：日本自然保護協会（担当：安部）03-3553-4103/080-5067-0957

【中部】

◆第 35 回 全国豊かな海づくり大会～富山大会～　での海藻おしば協会の活動

日時：2015 年 10 月 24 日（土）、25 日（日）10:00～16:00
場所：富山県射水市海王丸パーク
イベント広場でのブース「海藻おしばワークショップ」開催
スタッフ：野田会長・白井洋子認定講師・田辺裕美実技認定講師・枡郷かおり実技認定講師・辻 則子会員・多田憲一会員　　※詳細はこちら→　http://www.yutakanaumi-toyama.jp/

◆国際水産資源研究所 清水庁舎の一般公開　テーマ「知られざるサメの生態と漁業」

日時：2015 年 10 月 31 日（土）10:00～16:00（15:00 受付終了）
場所：国立研究開発法人水産総合研究センター　国際水産資源研究所（静岡県静岡市清水区折戸 5-7-1）
※詳細はこちら→　http://fsf.fra.affrc.go.jp/open/2015shokoukai.htm
※入場は無料です。事前のご連絡も不要です。当日直接会場へ（公共交通利用で）お越しください。
サイエンスカフェ　甲斐幹彦博士「サメの資源評価と管理」、仙波靖子博士「サメの生態」
その他の展示・イベント：チリメンモンスター探し、マオナガ・マグロなどの冷凍標本の展示、常設展示（研究紹介パネル、マグロ類のはく製、鯨の頭骨・イルカの骨格・サメの顎・サンゴの標本、調査機材など）、ロープワーク教室など
問い合わせ先：国際水産資源研究所　業務推進部業務推進課　Tel. 054-336-6013

【近畿】

◆大阪自然環境保全協会　「海の観察会」

日時：2015 年 11 月 8 日（日）10:00～15:00
場所：大阪府阪南市尾崎海岸
集合：南海電車「鳥取ノ荘」駅改札前　10:00
解散：阪南市地域交流館（南海電車「尾崎」駅近く）15:00 頃

対象：どなたでも（中学生以下は保護者同伴）
定員：20 名（メール先着順）
参加費：大人 300 円、子供 200 円、家族 500 円
持ち物：弁当、水筒、帽子、貝殻を入れる容器や袋
雨天の場合：小雨でも実施します。
★申し込み：参加者全員の名前、フリガナ、年齢、住所、電話番号を記入し、表題を「11／8 観察会申し込み」として、メールで申し込む。宛先は、umi@nature.or.jp 折り返し参加可否を連絡します。参加者は先着順。
問い合わせ先：大阪自然環境保全協会内「11 月 8 日海の観察会」係　Tel. 06-6242-8720

◆第 19 回紀伊半島研究会シンポジウム・第 15 回奈良女子大学共生科学研究センターシンポジウム　「紀伊半島沿岸の海の生物の保全を考える」

日時：2015 年 12 月 5 日（土）13:30～17:00
場所：奈良女子大学文学部北棟 N101 室
開会挨拶：和田恵次（紀伊半島研究会会長）
講演：　井川貴史（国土交通省和歌山河川国道事務所）紀の川大堰に係る環境調査結果およびその評価
　　揖善継（和歌山県立自然博物館）ウナギの資源動態
　　原田慈雄・武田保幸（和歌山県水産試験場）紀伊半島における漁業資源の変遷と現状
　　石田惣（大阪市立自然史博物館）大垣俊一　紀伊半島西岸の岩礁潮間帯における貝類群集の
　　木村妙子（三重大学生物資源学部）三重県の干潟生物の現況と長期変化
閉会挨拶：高田将志（奈良女子大学共生科学研究センター長）
問い合わせ先：紀伊半島研究会事務局 office@kii-penisula.sakura.ne.jp

【九州】

◆30 回国民文化祭
かごしま 2015 開催記念特別展示
海 Café「アートな海の生き物を語ろう」

日時：10 月 17 日（土）15:00～
第一話「サンゴを語ろう」

※以降、
10 月 31 日（土）第二話「クラゲを語ろう」
11 月 14 日（土）第三話「ウミウシを語ろう」
11 月 28 日（土）第四話「深海生物を語ろう」

◆第 13 回ながさき水産科学フェア　～体験！発見！不思議だらけの海の世界

新長崎漁港地区に集結する国立研究開発法人水産総合研究センター西海区水産研究所と長崎大学環東シナ海環境資源研究センターおよび長崎県総合水産試験場でつくる長崎水産研究三機関連絡会議では、第 13 回ながさき水産科学フェアを下記のとおり開催いたします。皆様のご来場をお待ちしております。

日時：2015 年 10 月 18 日（日）9:30～15:00

場所：西海区水産研究所、長崎大学環東シナ海環境資源研究センター、長崎県総合水産試験場（いずれも長崎市多以良町の新長崎漁港地区）※駐車場あり（三機関合計２１０台）

※同日開催の「長崎おさかな祭り」会場（長崎魚市場）から無料シャトルバスを運行します。

※詳細はこちら→　http://snf.fra.affrc.go.jp/event/fair13/ura.pdf

サイエンスカフェ　海や魚のお話しをわかりやすく紹介し、ご質問にお答えします（各 30 分）

10:30 頃「フグの気になる秘密～変なカラダと危険なドク～」長崎大学環東シナ海環境資源研究センター

11:30 頃「海と陸の境界にある自然ー潮が引くと姿を見せる生き物たちー」西海区水産研究所

12:30 頃「ウニってどんな生き物？」長崎県総合水産試験場

13:30 頃【特別企画】「クラゲの大変身　～研究者といっしょに考えてみませんか～」西海区水産研究所

問い合わせ先：西海区水産研究所　業務推進課　Tel. 095-860-1600

その他の展示・イベント：西海区水産研究所（パネル展示、チリメンモンスターを探せ、魚介類のタッチプール、おさかなクイズ　ほか）、長崎大学環東シナ海環境資源研究センター（魚の解剖体験、海洋生物観測機器、パネル展示、お魚ストラックアウト、練習船公開　ほか）、長崎県総合水産試験場（種苗生産親魚展示、お魚○×クイズ、海藻押花しおり作り体験、海藻麺づくり体験　ほか）、水産庁九州漁業調整事務所〔特別参加〕漁業取締船「白鷗丸」一般公開　※注意：船上は足場の悪い所もありますので、船内見学（乗船）を希望される方は、できるかぎり運動靴などの歩きやすい靴でお越しいただきますよう、お願いいたします。

【沖縄】

◆名蔵アンパル・ラムサール条約登録 10 周年記念講演

日時：2015 年 11 月 1 日（日）　第 1 部 10:00～12:00、第 2 部 13:00～16:10

場所：石垣市健康福祉センター　石垣市健康福祉センター　2 階視聴覚室

主催：石垣市　後援：環境省　主管：アンパルの自然を守る会

プログラム

第 1 部「アンパルヌミダガーマユンタの世界」　　コーディネーター：島村賢正

- アンパルヌミダガーマユンタ：石垣中学校郷土芸能部
- 講演１：アンパルヌミダガーマユンタの時代と社会　　大田静男
- 講演２：アンパルヌミダガーマユンタのカニたち　　小菅丈治
- パネルディスカッション：大田静男、小菅丈治、谷崎樹生、鹿谷法一、新垣重雄

第 2 部「湿地、干潟の過去、現在、未来」　　コーディネーター：小菅丈治

- 講演１：沖縄の湿地について　　鹿谷法一
- 講演２：マングローブについて　　谷口真吾

- 講演３：アンパルの変遷　　谷崎樹生
- 講演４：アンパルの野鳥について　　佐野清貴
- パネルディスカッション：鹿谷法一、谷口真吾、谷崎樹生、藤本治彦、佐野清貴

思っていること 言いたいこと

『うみひるも』に投稿してみませんか？

編集部へのお手紙も大歓迎です。

・ニュースを読んで思ったこと

・イベントに参加して感じたこと

・連載エッセイの感想（執筆者へのお手紙）

・「うみひるも」へのご意見・ご要望

※匿名・非公開ご希望の場合は、その旨ご明記ください

メールアドレス hirumo@live.jp　または便利な下記フォームへどうぞ。

https://www.secure-cloud.jp/sf/1415980618OyEOasMf

5．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより(その88)】

サカサクラゲ類のポリプが白浜に出現！

サカサクラゲ類のクラゲは、通常のクラゲの姿勢とは天地逆向きになって海底暮らしをする変わったクラゲである。熱帯が主な生息海域なので、我が国では九州南部以南に分布する。桜島の見える海岸に行くと、浅い水路の底にサカサクラゲがイソギンチャクのように大集合している。しかし、うかつに近寄っただけでちくりと刺胞で刺される。

サカサクラゲ類はクラゲが有性生殖し、赤ん坊のプラヌラを産んで子孫を増やす。その一方、ポリプの本体、つまり花のような萼部（がくぶ）からプラヌロイドという特殊な出芽体での増殖も行う。プラヌロイドは次々とポリプから一個ずつ遊離し、回転しながら遊泳する。やがて飼育容器に付着してポリプになり、たくさんのクローンとなる。

和歌山県田辺湾からは2013年8月初旬にこのようなポリプが京都大学瀬戸臨海実験所の研究棟の水槽に出現した。それからずっと実験室で飼育しているが、ポリプからエフィラを遊離させて、この類であることが確認できた。勿論、サカサクラゲ類のクラゲは、これまで和歌山県田辺湾岸からの記録は全くない。この珍しいポリプは、水族館の外部配管より侵入したプラヌラ由来と推測しているが、原産地の特定は将来の遺伝子解析に期待したい。

2015年8月、京都大学白浜水族館の幾つかの水槽にもこのようなポリプがたくさん出現しているので、今回、写真撮影した。是非とも白浜水族館でこのような珍しいポリプを探して観察して頂きたい。このポリプの柄はたいへん長いことで、良く知られたミズクラゲなどのポリプとすぐ区別がつく。１個のポリプはエフィラをたった１個しかつくらないのも特徴である。地球温暖化にともなって南方系のサカサクラゲはポリプだけでなくクラゲも将来は生息するようになるのだろうか？

写真　京都大学白浜水族館に出現したサカサクラゲの多数のポリプ

6. 有明海と三陸の水辺から(20)　田中　克

「有明海塾」の開校

かつては生物生産性と生物多様性の両面で限りなく豊かな海、有明海は、今では瀕死の海に至っています。諫早湾潮受け堤防に設置された水門の開門を巡り、司法までもが混迷の極に陥り、漁業者間、漁業者と農業者間に深刻な亀裂をもたらし、地域社会の崩壊を招く、深刻極まりない事態となっています。20 世紀後半の半世紀の経済成長最優先の産業や暮らしの在り方が、この海の豊かさの根幹をなす森里海の連環を壊し続け、今日の深刻な事態に至りました。それを元に戻すには壊したのに匹敵する時間がかかり、次世代重視のもとに世代間をつなぎ直すことが不可欠と思われます。柳川市に誕生した NPO 法人 SPERA 森里海･時代を拓くは、高校生や大学生が主役になるように、有明海の腎臓機能を担う干潟体験の場を作り、若者の有明海への関心を高める催しを重ねてきました（写真１）。

写真1　有明海の泥干潟を初めて経験した高校生：大学生となり有明海塾を担う

これらの取り組みから、地元柳川市や八女市の高校を卒業し、佐賀大学などに入学した学生がふるさとの有明海や柳川の掘割の水辺環境の再生を通じて、自らの未来を切り開こうとの機運が盛り上がってきました。そして、それは志のある若者が現場実践を通じて学び、考え、行動するための「有明海塾」の立ち上げとなりました。2015 年 8 月 29 日に「有明海塾」の開講式が行われ、以下のような立ち上げの趣旨が確認されました。

『有明海は日本の宝であり、わが国沿岸環境と沿岸漁業を再生させる「試金石」と言える存在である。宝の海から瀕死の海に至った有明海をもとの豊かな有明海に戻すには、自然と自然、自然と人、人と人の“環”と“和”を紡ぎ直すことが不可欠である。とりわけ、先人（の知恵）と私達のつながりを、続く世代につないでいくことが求められる。

2010 年 10 月 30 日に柳川市で開催された第 1 回森里海連環による有明海再生シンポジュウムを機に、市民・漁民・研究者の連携が生まれ、有明海の腎臓機能を再生させる「干潟再生実験」を

通じて人の輪が広がり、最近では小学生から大学生まで、これからの時代を担う世代を包み込んだ取り組みへと広がり始めている。

地球環境問題の深刻化や“理念なき”政治や経済の進行に見られるように、時代は“混迷”の度を深め、先を見通せない状態に至っている。この困難な現状の打開には“つながりの価値観”の再生が不可欠である。今こそ、森と海の国、日本ならではの「森里海連環」の理念の普及とそれに基づく実践を積み重ねながら、自らのふるさとへの思いを深め、この国の自然と社会の未来を拓く“志”に溢れた人材を生みだすことが強く求められる。

このような目的のもとに、世代間のつながりを軸に、有明海にかつてのアサリが蘇り、柳川の掘割がニホンウナギの郷になる近未来創生のための「有明海塾」を開講する。それは、持続可能社会の前提となる低炭素社会の基盤であり、すべての価値判断基準を、続く世代の幸せ第一に切り替え、“いのちのふるさと海と生きる”道を歩むことでもある。』

開講式の様子（写真２）は、朝日新聞に紹介され、そのことに関心を持った地元テレビの番組に取り上げられ、夢のある活動として表彰されるという思わぬ反響が生まれました。

写真2　8 月 29 日に NPO 法人 SPERA 森里海の事務所で行われた「有明海塾」開講式

4 章　貧しい食生活と豊かな学び

敗戦から 60 年以上が過ぎた現代では、10 歳前後の少年少女たちはファミリーレストランと称する食堂などで好きなメニューを選び、食欲を満たしたり、豪華なデパートで好きな玩具を買ってもらったりという、私が少年だった頃には想像もできなかったほどの豊かな生活を送っています。しかし軍国少年だった私たちは、敗戦後も非常に貧しい食生活を強いられ、配給される食糧だけに頼っていたら、家族全員が餓死することは確実でした。そのため私の母は毎日のように、かなり離れた里山に住む知り合いの農家へ、米や野菜の買い出しに出かけました。ただ敗戦直後の日本は猛烈なインフレ状態にあり、現金の使用も制限されていたので、母は米や野菜の代金として和服や上等な反物などを竹篭に詰めて背負い、小学校入学前の弟を連れて、遠方まで歩いたのです。また東京などの大都会からは、食糧購入のために和服その他の貴重品をリュックに詰めて背負った人たちが、蒸気機関車に引かれる粗末な客車に超満員の状態で乗り、遠方の農家で貴重品と交換した米などを詰めたリュックを背負って帰るのですが、それを東京の各駅に待ち構えていた警察官たちに没収されるという事件が多発しました。

没収されたヤミ米と呼ばれる米などが、その先どのように処分されたかは全く不明だったのですが、当時の政治家や警察関係者そして役場の職員などがヤミ米などを食べずに餓死したという例を私は知りません。私も母が貴重品などを代金にして購入したヤミ米などを食べて生き残った 1 人ですが、米が手に入らなかった日の夕食として、母はおいしそうな黄色いパンを作ってくれたことがあります。しかしこのパンは、外見的な美しさから期待した味はなく、しぶいだけだったのです。この味の原因は、原料が配給されたトウモロコシ粉だったためなのですが、それはアメリカの広大な畑で生産され、牛の餌として使われるはずだった品を、食料不足の日本人のために提供してくれた「放出物資」だということがわかりました。当時は砂糖も正規な醤油もヤミルートでしか入手できなかったため、配給されたトウモロコシ粉で作るパンにまともな味を付けることなど、一般家庭では不可能なことだったのです。私はこの日の夕食として 1 個だけの黄色いパンを、うす暗い電燈の下で食べたこと、そしてそのサイズや弾力などを今でも時々思い出します。そして我が子たちにこれだけの貧弱な食事しか与えられなかった母の悲しさも想像できるのですが、これは現在もアフリカなどで難民を襲っている事態にそっくりで、森も農地も無い乾燥地帯で飢えに苦しむ親子たちの姿をテレビで観るたびに、私の胸は耐え難いほどに痛みます。

私たち親子が敗戦前後の母国で受け、そして現在もアフリカなどの不毛地で生きる難民の親子たちが受けている苦しみは、どちらも戦争あるいは紛争と呼ばれる人間同士の醜い争いによるものですが、その元凶をたどると、意外なところへ行き着きます。しかし私も戦時中は軍国少年として、アメリカやイギリスを敵視し、戦争の元凶にごくわずかの手伝いをしていたことになりますが、人類のすべてを地球上から消し去る力を有する元凶の存在に私が気付くのは、はるかのちのこととなります。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災襲来以前は、国内のどの地域でも、人々は豊かさに恵まれた生活を送れるようになっていましたが、太平洋戦争の敗戦直後には、大地震に触発された巨大津波に襲われたような廃墟が各地に散在し、被害者は信じられないほどに悲惨な生活を送っていたのです。幸いにも東京大空襲の直前に疎開できた私と家族は、木下（きおろし）という田園地帯で避難生活を送り、敗戦直後も幼い小児だった私は、粗末な食事に耐えながらも、縄文時代や弥生時代に近い生活を楽しんでいたのです。

現代では小児たちが家庭の状況次第で、幼稚園生の頃からエリート教育を受け、将来の立身出世に備えるという傾向が強まってしまいましたが、私が小児だった頃の親たちは、「お国のために」を口癖のように繰り返しながら、我が子を育てていたのです。とても本音とは思えない口癖だったのですが、太平洋戦争中は、我が子である幼い男児も、成長すれば招集されて激戦地へ送り出される、という予測が常識化してしまい、そのため幼い我が子に徴兵保険とやらを掛けていた、ということを私は敗戦後に知りました。本心ではないにしても、当時の親たちは、薄っぺらな赤い紙に印刷された招集令状によって、我が子を奪われ死地に送り込まれることを覚悟するために、「お国のために」を唱えていたような気がします。

軍の幹部が 100 年戦争と称していた太平洋戦争は、開戦後 4 年足らずで敗戦を迎えてしまったため、私たちが「お国のために」出征していのちを失うという機会は訪れなかったのですが、当時の少年たちはみな、将来は一兵卒となり米英軍と戦って死ぬのだと、覚悟するように教育されていたのです。私もそのような少年の一人だったはずですが、敵軍と戦って死ぬと覚悟した記憶は残らず、なぜか、8 歳で木下へ疎開した頃から新制の木下中学校を卒業するまでの 7 年は、非常に楽しい少年時代だったという記憶のほうが強く残っています。

日本は神の国であり、その神からいのちを授かった私たちは、「お国のため」つまり神のために自分のいのちを捧げるのはあたりまえと教育され、それを心から信じていたのですが、この神の国が鬼畜の国とされたアメリカやイギリスに敗れてしまったという事実は、疑うことを知らない少年だった私たちにとって、信じられないほどの衝撃的な事件だったと言えます。しかし私には、敗戦直後の学校で教師が語った「今まで沢山のウソを教えてきました」あるいは「日本は神の国ではありませんでした」などのほうが一層衝撃的で、この時以来、私は学校そしてマスコミなどが語る「真実」はまず疑う、という習慣が身についてしまいました。10 歳の小学校 4 年生には早すぎる習慣だったと言えそうですが、これは以後も教育を受け、さらに大学の教官として研究や教育を続けるためにも、非常に役立つことになったのです。

尊い神国と信じていた大日本帝国が、「鬼畜の国」と軽蔑していたアメリカやイギリスなどに敗戦してしまったために、それまで全国民が共有していた「お国のためにいのちを捨てる」という生きる目的は失われてしまいました。そして「これから我々はどう生きるべきか」が、国民共通の大きな問題になったはずです。しかしおとなたちの多くは、空襲で破壊された都市や工場の復興、あるいはヤミ商売で稼ぐことなどに熱中し、家族を養うことが「自分の目的」と思い込んでいたような気がします。

このように正しいと信じてきた「生きる目的」が空中分解し、それに代わるはずの新たな「生きる目的」も見出せずにおとなたちが迷っていた私たちの国に、「民主主義」や「共産主義」などの新しい言葉が届けられたのです。国の政治などに無関心となり、金儲けなどに熱中して、右往左往

し始めたおとなたちより、「神の国」も「鬼畜米英」も登場しなくなった小学校の教室で授業を受けられるようになった私たちのほうが、これらの言葉がどのような意味を持ち、新しい日本国の形成にどのように関わるか、などということを真剣に考えたような気がします。

敗戦の 2 年半後に私は小学校を卒業し、その 3 年後に新制中学校も卒業したのですが、教師たちは、戦前から戦中にかけて頭に詰め込まれた「目的」が煙のように消失してしまったためか、「何を教えるべきか」と迷い続けていたようです。それから 10 年を経た頃には、戦後のベビーブームで誕生した大勢の児童たちの入学が始まり、進学熱に浮かされるタイプ以外の教師は、小中学校の現場から、発足直後の PTA によって排斥されてしまったのですが、私が在学した木下小学校と木下中学校には、敗戦後の特産物と言うべき自由な空気が健在のままでした。

その頃の教師のほとんどは戦前の師範学校などで論語を学んだ経験があるためか、「少年老い易く学成り難し」などで始まる漢詩を教えながら、まだ中国の古代そのままのような里山で、森の構造を解説したり、食用キノコの判別法やそれらの生態について教えてくれたりしました。現代の小中学校にはありふれたような理科用の実験器材にも乏しいままの教室では無理な生物教育も、多様で豊かな動植物たちが暮らす里山へ出かければ、現代よりはるかにすばらしい形で受けることができたのです。

数学という教科で重要な部分を占める三角法や三角関数は、現代の少年少女たちにも理解し難い存在と言えますが、私が小学校 6 年生となった時に、クラス担任の先生は私たち全員を校庭に連れ出して、電柱や国旗用の旗竿の長さの測り方を教えてくれました。方法は簡単で、小さな四角形の板の一辺に沿わせて分度器を張り付け、その中心に固定したひもの先に小さな分銅を結び付けただけの道具を使ったのです。そして巻尺によって柱の根元からの距離が 10 メートルあるいは 20 メートルになる地点を決め、そこに立って板の分度器底辺側の端から、その延長線方向をのぞき、その先が柱の上端に重なったところで、分度器の中心から垂れた糸が示す角度を測り、その状態を 100 分の 1 の図形に描きます。もしこの図形に描かれた柱の長さが n センチメートルであったとすれば、柱の実際の長さは n×100 センチメートルになります。このような野外での実技を駆使した授業では、すべての児童が喜んで活動します。「意味など分からなくても受験のためだから」と数学などの原理や定理を無理に記憶させられる現代の学校とは異なり、私たちが通った貧しい施設の小学校には、天国のように明るくて豊かな雰囲気があったのです。

小学校を卒業した私たちは、学制改革に従い前年度に設置された新制中学に、全員そろって入学しました。最初の校舎は、公民館から陸軍の兵舎そして戦後に再度公民館へと変わった、廃屋のような木造家屋でしたが、次年度には、木下町郊外の水田と里山に挟まれるという、緑豊かな自然環境に恵まれた敷地に建つ新校舎に移りました。そして新 2 年生となった春に、新緑で彩られた里山や水田を眺められる教室で、新しい理科の教科書を開いた私は、植物の重要な働きとしての光合成、その働きに必要な葉緑素（クロロフィル）と呼ばれる色素などについて、詳しく説明したページを発見して感動しました。

戦中戦後を通じて貧しい食生活に耐えてきた私たちは、米や麦あるいはそれらの加工品を食べることによって生きてきたと悟ったのですが、米や麦の主成分としてのデンプンには葉緑素によって吸収された太陽光のエネルギーが詰め込まれている、ということを初めて知ったのです。デンプンの塊のような米や麦あるいは栗などは、太陽エネルギーが詰まった缶詰のようなもので、私たちは

それらを食べることによって、エネルギーを取り出し、体温や運動の力に変えながら生きている、と理解することができたのです。

母が毎日のようにヤミ米を求めて遠くまで歩き、都会の人たちは超満員の列車に乗ってヤミ米買いに出かけたこと、そしてある裁判官がヤミ米を求めなかったために餓死したことなどは、すべて米が太陽光のカプセルのような存在で、そのエネルギーが生きることに欠かせないためである、とわかったのです。このような、太陽から緑色の植物へ、そしてさらに動物へという、重要なエネルギーの流れを知って感動したのは、敗戦後約 4 年を経た時点で、その舞台は緑あざやかな里山と水田に囲まれた敷地に新築された中学校の校舎内だったのです。（つづく）

8. 事務局便り

- 「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は、事務局までご連絡ください。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし、写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。
- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ご一緒に講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ口座「ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会」へお送りください。なお、送金される場合は、送金の内容について事務局にお知らせください。
- うみひるもの表紙を飾る海の生き物の写真を募集しています。種名同定済みの写真ですと、大変助かります。海にお出かけの際には、カメラご持参で。そして、ベストショットが撮れたら、是非、うみひるも編集部までお送りください！
- お気軽にご投稿ください。　https://www.secure-cloud.jp/sf/1415980618OyEOasMf

9. 編集後記

研究施設などの一般公開が目白押しのシーズンで、今号のイベントページは盛りだくさんになりました。澄み渡る秋空の下、ぜひ解放感抜群の海辺にお出かけください！（ちよ）

今年も早や残すところ 2 ヶ月半となりました。いつの間にか秋になってしまったという感じの今年の夏でした。小豆島、長崎、北海道と移動を重ねたこの 1 ヶ月でした。紅葉も盛りの北海道から雪の予報に追い立てられるように京都に帰ってきました。京都はこれから秋に入ります。長い日本列島を感じます。その南端の沖縄県では、辺野古の海の埋め立て許可を翁長知事が取り消しました。それでも国は軍事を優先して、あの素晴らしい海を埋め立てることを止めようとしません。軍政が日本を引っ張っていく 80 年前が再現しているのでしょうか。（宏）

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。年会費は個人 2,000 円、団体 20,000 円。匿名による参加も可能。会員は、各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行い、そのための助成金申請をすることができます。入会希望の方は、事務局まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

メールマガジン『うみひるも』第 165 号
2015 年 10 月 16 日発行
発行「海の生き物を守る会」代表　向井 宏
編集：瀬戸内 千代
〒606-8413　京都市左京区浄土寺下馬場町 69 番地
TEL&FAX:075-741-6281　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ URL：http://e-amco.com/
銀行口座：ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会
全銀システムで送金する場合は、068 店（ぜろろくはち店）0667302 ウミノイキモノヲマモルカイ